

「実践と学問の融合・発展－東京女子医科大学看護学会の未来をともに考える－」

東京女子医科大学看護学会の未来に向けて

－看護系同窓会の立場から－

高坂美枝（東京女子医科大学看護系同窓会）

東京女子医科大学の看護系同窓会が発足したのは2001年10月です。また看護学会が発足したのも2004年10月でして、10月は女子医大の看護関係者にとって、実りの季節でもあり、成果の出せる月なのかもしれません。

東京女子医科大学看護系同窓会の一本化を提案されたのは1998年、当時の看護短期大学学長で、現在の至誠会会長の橋本葉子先生です。看護短期大学は看護学部となり、看護専門学校とともに、看護系教育課程修了者の看護の存在をアピールする場を設けていかななくてはならないと、一本化の為に、組織編成し、大きな団体として活動することになりました。看護系同窓会の目的は「会員相互の啓発と親睦を図り、看護専門職者として看護の発展と社会に貢献すると共に、東京女子医科大学の看護の発展に寄与すること」としました。これからの看護は看護者が主体となって、医療を動かしていく必要があります。それには、まずは自分の能力を高め、実践し、維持をすること、また管理者として、教育者として、研究の出来る人にならなければいけないと考えます。東京女子医大の看護教育課程は今年で、74年目を迎えました。74年間に培われた看護の歴史と伝統の上に、看護系教育課程修了者が結束し、新しい時代の看護ニーズを先取りし、女子医大の看護の存在をアピールする必要があります。

看護系同窓会が発足する以前は時代とともに開校し、閉校してきた卒業生は「巴会・碧会・秋桜会・キャンドル会・厚友会」と呼称し、それぞれに個別に活動して居りました。中でも1944（昭和19）年の開校から1951（昭和26）年の閉校までの7年間の東京女子厚生専門学校（保健婦養成所）の厚友会の方々の仲間で1956（昭和31）年に「看護歴史研究会」をつくり毎月律儀に例会を重ね、48年も続けております。発端は「保健婦は何をするひとか？住民の側に立つその本務を追求」のために歴史学習の必要性を痛感して誕生したのだそうです。「看護歴史研究」誌のタイトルに「STUDIUM HISTORIAE CURAE」とあり、その由来の説明がありました。CURA（クーラ）とはラテン語で今日の「看護」に相当するようで、CURAには「世話、関心、看護、治療」といった意味があり、看護を広い意味でとらえ、看護を学術的に研究して行くという目的でラテン語表記としたそうです。看護史研究会代表の坂本玄子さん達は、また2003年12月、東京女子厚生専門学校史・厚友会史「花宴」を発刊され、当時の先生方や学生の生き生きとした姿が偲ばれ、戦後の「新しい女性」の先駆的な姿がそこには見えます。

「知は現場にある」とも言われております。いろいろな立場でものを見、沢山の情報を有効に使うには知識を一般化しなければなりません。ここで「実践と学問の融合・発展」があるわけです。看護系同窓会員の大多数は実践の場で働いております。全国で活躍している皆様とともに東京女子医科大学看護学会の発展を祈ります。実践の場でのこれまでの学びを研究としてまとめ、社会に発表していくことが、さらなる看護の質を高めることにつながると考えます。ここに東京女子医科大学看護学会が発足することにより、同窓会員のこれまでの実践を研究とする場が提供されることは喜ばしいことと思います。
